

依頼論文

◆ 第 120 回記念学術大会／理事長講演

(社) 日本補綴歯科学会第 120 回記念学術大会理事長講演

補綴歯科のあゆみと未来

古谷野 潔

President's Keynote Lecture

Past and Future of Prosthodontics

Kiyoshi Koyano, DDS, PhD

抄 録

本年の学術大会は、第 100 回大会以来の記念大会である。この機会に第 100 回以後の学術大会を軸に本学会の歩みを振り返り、本学会の現在と今後について考える。

1998 年開催の 100 回大会は、「健康科学における歯科補綴学—21 世紀に目指すもの—」をテーマとして歯科補綴学の将来展望を示した。2000 年には国際シンポジウム大阪 2000 を催し、その後、韓国、中国、インドの補綴学会との交流協定締結や Greater New York Academy of Prosthodontics (GNYAP) との 2 度の共催学会、International Association for Dental Research (IADR) の Prosthodontic Research Group との連携などへと発展した。2002 年には英文誌の発行を開始し、現在では海外からの投稿論文も増え、impact factor (IF) 取得目前まで来ている。

2001 年の 106 回から 112 回までは、「新しい歯科補綴のパラダイム」をメインテーマに据え、evidence-based medicine (EBM) への対応が図られ、Minds 掲載の 2 つをはじめとする多くのガイドラインが作成された。

一方、113 回から 120 回までは、「咬合・咀嚼が創る健康長寿」がメインテーマとして取り上げられ、補綴歯科の目標を歯や口腔から、健康長寿という全人的な価値に広げるものであった。

学会活動の原点は、専門分野に興味を持つ者が集い、研究(臨床)成果を持ち寄って議論し、切磋琢磨することによって、学問(臨床)の進歩に寄与することにある。今後は、学会活動の原点である学術大会と学会誌を幅広い会員のニーズに適確に応える体制として、より多くの会員の参加を促進し、本学会の活力を高める必要がある。

本学会は、臨床分野の専門学会であり、臨床の進歩を通して国民の健康の向上に資することが最大の使命である。臨床研究を推進し、臨床の進歩を主導する学会を目指していかねばならない。そのためには、「臨床と研究の乖離」、「大学と臨床医の乖離」を埋めていかねばならない。

和文キーワード

日本補綴歯科学会の歩み、第 100 回記念大会～第 120 回記念大会、本学会の将来の方向性

I. はじめに

本年の第 120 回学術大会は、第 100 回大会以来の記念大会である。この機会に第 100 回大会以後の学術大会を軸に本学会の歩みを振り返り、本学会の現在と今後について考える。

1. 第 100 回記念学術大会

第 100 回記念学術大会は、1998 年 11 月 26～28 日に、東京国際フォーラムにおいて、「健康科学における歯科補綴学—21 世紀に目指すもの—」をテーマとして開催された。

21 世紀に求められる Evidence-Based Dentistry を国際的視点から捉えるため、Maurizio S. Tonetti 先生

社団法人日本補綴歯科学会理事長

九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座インプラント・義歯補綴学分野教授

President, Japan Prosthodontic Society

Professor and Chairman, Section of Implant and Rehabilitative Dentistry, Faculty of Dental Science, Kyushu-University

表1 Presidents and scientific meetings of Japan Prosthodontic Society after the 100th commemorative scientific meeting
第100回記念学術大会以後の学会長および学術大会

小林義典会長	
1998	100回(東京:腰原 好大会長)
田中久敏会長	
1999	101回(福岡:寺田善博大会長), 102回(名古屋:川口豊造大会長)
2000	103回(大宮:天野秀雄大会長), 104回(大阪:川添克彬大会長)
川添克彬会長	
2001	105回(東京:小林喜平大会長), 106回(盛岡:石橋寛二大会長)
2002	107回(東京:小林義典大会長), 108回(名古屋:藤井輝久大会長)
大山喬史会長(理事長)	
2003	109回(東京:石上友彦大会長), 110回(長野:甘利光治大会長)
2004	111回(東京:大山喬史大会長), 112回(横須賀:豊田 實大会長)
赤川安正理事長	
2005	113回(大阪:野首孝嗣大会長), 114回(新潟:河野正司大会長)
2006	115回(札幌:平井敏博大会長) *学術大会年1回化スタート
平井敏博理事長	
2007	116回(神戸:井上宏大会長)
2008	117回(名古屋:田中貴信大会長)
佐々木啓一理事長	
2009	118回(京都:矢谷博文大会長)
2010	119回(東京:志賀 博大会長)
古谷野 潔	
2011	120回(広島:赤川安正大会長)
2012	121回(横浜:櫻井 薫大会長)

(University of Bern, Switzerland), James P. Lund 先生(McGill University, Canada)の2名の海外演者を招き,特別講演が行われた。また,小林義典会長(当時)が,「健康科学における歯科補綴学を展望する」と題した基調講演をされた。その要旨は,「歯科補綴学は,咀嚼系の損なわれた形態と機能の回復,さらにそれらによる健康の維持を標榜してきたにもかかわらず,修復処置主導型の歯学のなかで主要な役割を果たしてきた。今後は,日本補綴歯科学会会員が咀嚼系における医学としての意識を明確にし,前述の今後の歯科医師の歩むべき方向をリードできるように努力,進展させねばならない」というものであり,今後歯科医師に求められる能力として以下の7点が示された。これは超高齢社会を迎えた今日,語られている「今後求められる歯科医師像」とほぼ同じ内容を10数年前に示した先見性のある内容であった。

1. 修復処置主導型の治療に代わる予防に基づく治療法

の選択ができる

2. リスクを評価できる
3. 口腔顔面痛,摂食機能障害,唾液分泌機能障害,口腔粘膜病変,非菌性感染などを含めた口腔疾患の診断と治療に熟達している
4. 薬物療法の応用に精通している
5. 医科的問題をかかえる患者を扱うことができる
6. 科学の進展に追随,適応できる
7. 歯科処置が技術的に優れている

また,10本という多数のシンポジウムが開催された。その主な内容は,1. 高齢者のリハビリテーション,2. 口腔インプラントの新たな視点,3. 材料・技術の進歩と歯科補綴治療,4. 咬合治療と全身の健康,であった。この内容からも当時,本学会が将来をしっかりと見据えていたことが理解できる。

表2 Themes in scientific meetings of Japan Prosthodontic Society after the 100th commemorative scientific meeting
第100回記念学術大会以後の学術大会のテーマ

100回：健康科学における歯科補綴学—21世紀に目指すもの—
101回～105回：テーマの設定なし
106回：新しい歯科補綴のパラダイム—エビデンスとアセスメントの確立に向けて—
107回：新しい歯科補綴のパラダイム—咬合の新しい展開—
108回：新しい歯科補綴のパラダイム—歯科補綴の専門性—
109回：新しい歯科補綴のパラダイム—補綴における美の追求—
110回：新しい歯科補綴のパラダイム
111回：新しい歯科補綴のパラダイム—口腔の機能を測る—
112回：新しい歯科補綴のパラダイム—生体との接点を求めて—
113回：咬合・咀嚼が創る健康長寿
114回：咬合・咀嚼が創る健康長寿
115回：咬合・咀嚼が創る健康長寿
116回：咬合・咀嚼が創る健康長寿
117回：咬合・咀嚼が創る健康長寿
118回：咬合・咀嚼が創る健康長寿
119回：咬合・咀嚼が創る健康長寿
120回：咬合・咀嚼が創る健康長寿—補綴歯科が発信するライフイノベーション—

2. 第100回記念学術大会以後の学術大会と本学会の歩み

第100回記念学術大会以後の学会長および学術大会を表1に示す。また、その間の学術大会のメインテーマを表2に示す。表に示したとおり、101回から105回までは学術大会メインテーマは設定されていない。また、抄録集をみると、会長、大会長の挨拶等もない。現在は、学術委員会と大会長が協働して、メインテーマのもと、学会が目指す方向を考えながら学術大会のプログラムを企画しているが、当時はまだそのような企画運営の仕方ではなかったためと思われる。101回から105回まではメインテーマが設定されていないので、シンポジウムのトピックを紹介することを通して、当時の本学会の活動や方向性を見てみる。

1) 101回大会から105回大会まで

101回大会(1999年春)では、「破折を防ぐ支台築造」、「日常臨床における検査・診断法に関する検討」、「これからの歯学教育への提言」といったテーマが取り上げられている。統一したテーマはないものの、今日まで本学会が取り組んできた重要課題が提示されている。また、この1999年9月に、初めてのニュースレター「Letter for Members」が発刊された。当時は、ホームページ

も電子メールもなく、補綴学会誌のみが会員と学会をつなぐ情報源であったため、ニュースレターによって会員に多くの情報を発信することは画期的であった。

102回大会(1999年秋)では、「日常臨床における検査・診断法に関する検討」が続けて取り上げられている。また、「健康科学における歯科補綴学：咀嚼・嚥下障害を考える」という、今日の老年歯科医学、健康科学としての補綴学の重要課題が初めて取り上げられている。さらに、「TMDのためのスプリント療法の実践」に関するシンポジウムも開催されている。102回大会で忘れてはならないのは、今日まで続けて実施されている「課題口演コンペティション」がスタートしたことである。

103回大会(2000年春)では、「卒前臨床実習の検証」が取り上げられ、教育についても議論がなされた。また、「歯科における審美学」、「味覚と補綴処置」なども取り上げられている。続く104回大会(2000年秋)では、「加齢による口腔機能の変化」、「加齢を考慮に入れた補綴治療のための検査・診断」、「成人患者と高齢患者の補綴学的対応(治療方針)の違い」といった老年歯科医学に関するテーマがまとめて取り上げられている。

104回大会開催時には、会期を延長して、International Prosthodontics Symposium Osaka

2000 という国際的な会を併催した。これは本学会が初めて主催した国際的な会であり、本学会の国際化の元年とも言える企画であった(1992年に広島で World College of Prosthodontics が開催されているが、これは本学会と International College of Prosthodontists [ICP] との共催であった)。21世紀を迎えるにあたり、Gunnar E. Carlsson 先生 (University of Göteborg, Sweden) と James D. Anderson 先生 (University of Toronto, Canada) が、「21世紀における歯科補綴学のストラテジー」をテーマに特別講演をされた。また、「ミレニアムを迎えた審美補綴の最前線」、「1日で学ぶ補綴臨床のグローバルスタンダード」と題して、当時世界の第一線で活躍していた5人の海外演者を招いて、講演をいただいた。2001年の本学会の活動で忘れてはならないのは、「歯科補綴学専門用語集」の発刊(2001. 2)である。この後、各学会が用語集を発行したが、これはその端緒となるものであり、本学会が誇れる活動成果の一つである。

105回大会(2001年春)では、「顎口腔機能と脳機能との関わり」、「補綴臨床における検査・診断方法に関する検討」、「歯科補綴臨床の歯科医師臨床研修:現状と対応」といったテーマが取り上げられた。

2) 106回大会から112回大会まで

106回大会(2001年秋)から、久しく途絶えていたメインテーマを掲げて学術大会を企画運営するスタイルとなった。この106回では、「新しい歯科補綴のパラダイム—エビデンスとアセスメントの確立に向けて—」というメインテーマのもと、「新しい歯科補綴のパラダイム:根拠に基づく補綴臨床の展開」、「エビデンスを「創る」」などが取り上げられ、補綴学における evidence-based medicine (EBM) の課題と今後なすべきことについて議論された。また、「金銀パラジウム合金に代わる材料を求めて」という緊急シンポジウムが開催された。この106回大会では、臨床発表を奨励するために臨床講演というセッションが設けられた。また、初の国際セッションが開催され、韓国補綴学会 (Korean Academy of Prosthodontics: KAP) より多数の演題が発表された。

この2001年は、補綴学の国際的リーダーの来日に合わせて、それらのリーダーたちと本学会会員とがフランクに意見交換をする場として、第1回国際フォーラム(2001. 6. IADR Prosthodontics Group:幕張)、第2回国際フォーラム(2001. 9. George A. Zarb 教授 [University of Toronto, Canada]:福岡)が開催されたことと併せて、本学会の国際的活動が活発化、多様

化を始めた時期でもある。

107回大会(2002年春)では、「新しい歯科補綴のパラダイム—咬合の新しい展開—」をメインテーマとして、「インプラント補綴の咬合」、「咬合とEBM:現状におけるレビュー」、「新しい人工歯への挑戦」など、咬合に関するテーマが多面的に取り上げられた。

108回大会(2002年秋)においては、「新しい歯科補綴のパラダイム—歯科補綴の専門性—」をメインテーマとして、米国補綴歯科専門医の学会 (American College of Prosthodontists: ACP) 会長の David A. Felton 先生を招き「岐路に立つ歯科補綴学」と題して、米国における補綴歯科の専門性について講演いただいた。さらに「認定医に求められる補綴診療」を取り上げ、補綴歯科の専門性について学会として考える機会となった。

この2002年には、本学会の英文雑誌である Prosthodontic Research and Practice (PRP) が発刊された。当時はまだ、年1号の発行であったが、本学会の歴史の大きな1ページを飾るものである。

同年11月には釜山で開催された KAP の学術大会に本学会執行部 (JPS) が参加し、KAP との学術交流協定を締結し、翌2003年4月にはソウルにて第1回 JPS・KAP Joint Meeting が開催された。これは本学会としては初めての海外の学会との学術交流協定であり、協定に基づいて開催された初めての共催学会であった。

109回大会(2003年春)では、「新しい歯科補綴のパラダイム—補綴における美の追求—」をメインテーマとして、「いい笑顔—コンピュータで探る—」、「形態・機能美からトータルな美へ」など、審美についてのテーマが取り上げられた。また、「SDA (短縮歯列) のコンセプト—その運用と限界—」が取り上げられた。

110回大会(2003年秋)では、「新しい歯科補綴のパラダイム」をメインテーマとして、「ハイリスク患者の歯科治療」、「咀嚼筋に下顎位を語らせる」、「SDA (短縮歯列) のコンセプト—その運用と限界—」などが取り上げられた。

この2003年の12月には、Greater New York Academy of Prosthodontics (GNYAP) との第1回 GNYAP・JPS Joint Meeting が New York で開催され、本学会から50名近くの会員が参加した。

111回大会(2004年春)は「新しい歯科補綴のパラダイム—口腔の機能を測る—」をメインテーマとして、「クリニカルパスと症型分類」、「歯科補綴治療における診査・診断」などが取り上げられた。「症型分類」は、現在まで本学会で取り組んできた重要課題であり、この時に最初に学術大会で取り上げられた。また、111回大会時には第2回 JPS・KAP Joint Meeting が併催さ

れ、多数のKAPからの発表があった。

112回大会(2004年秋)は、「新しい歯科補綴のパラダイム—生体との接点を求めて—」をメインテーマに、「再生医療と歯科補綴学の接点」が取り上げられた。また、「補綴実技教育の評価を考える」といった教育に関するトピックも取り上げられた。

この2004年10月には「歯科補綴学専門用語集第2版」が発刊され、翌2005年2月には、社団法人日本補綴歯科学会が設立され、本学会の運営基盤が整備された。

3) 113回大会から120回大会まで

113回大会(2005年春)では、106回から112回まで取り上げられてきた「新しい歯科補綴のパラダイム」を廃し、新たに「咬合・咀嚼が創る健康長寿」というメインテーマを掲げ、「おいしさと健康：咀嚼と味覚の重要性」、「咬合・咀嚼が創る健康長寿」、「チェアサイドでの咀嚼機能検査法」などの話題が取り上げられた。

また、この2005年8月には、認定医制度からの移行という形で、補綴歯科専門医制度がスタートした。

114回大会(2005年秋)も同じく、「咬合・咀嚼が創る健康長寿」をメインテーマとして、「支台歯を増やすストラテジー—歯の移植とインプラント—」、「歯科補綴のストラテジックプラン」が議論された。また、この時から統計とPRP用英文の書き方に関するスキルアップセミナーがスタートした。これは、後述する統計ガイドの出版(2009.10)の端緒となる企画であった。

115回大会(2006年春)も同じく、「咬合・咀嚼が創る健康長寿」をメインテーマとして、「時間軸から見たリスクファクターと補綴歯科治療」、「メタルフリー補綴歯科治療の最前線」が取り上げられた。前回から引き続き、統計とPRP用英文の書き方(研究セミナー)も開催された。従来年2回開催されていた学術大会は、この115回から年1回化された。

この時期は、国際交流も盛んになった時期で、2006年8月には中国の成都にて、Chinese Prosthodontic Society (CPS) と、2007年3月にはインドのChennaiにて、Indian Prosthodontic Society (IPS) と交流協定を締結した。また、英文誌も年々投稿論文が増加し、2006年にはProsthodontic Research and Practiceが年4号発行する体制となった。

116回大会(2007年春)も同じく、「咬合・咀嚼が創る健康長寿」をメインテーマとして、「短縮歯列処置に関するマルチセンタースタディ」の宿題報告や「インプラントの咬合：分かっていること、いないこと」などが取り上げられた。この大会は、第5回Asian Academy of Prosthodonticsとの共催学会として開催

され、アジア各国から多くの参加者があった。この2007年にはInternational Association for Dental Research (IADR)のProsthodontic Research Groupと共同でPre-Prosthetic Regenerative Science Awardが創設された。また、10月には東京で第2回GNYAP・JPS Joint Meetingが約1,000名の参加を得て盛大に開催された。

117回大会(2008年春)も同じく、「咬合・咀嚼が創る健康長寿」をメインテーマとして、「大規模災害時の緊急補綴歯科治療」、「補綴歯科治療の何が問題で、何を解決するのか」などが取り上げられた。

交流協定を結んだKAPおよびCPSとの2国間交流を発展させ、日中韓の3カ国の共催学会を2年に一度、3カ国で持ち回り開催することを本学会がイニシアチブをとって提案し、その第1回の会合、すなわち第1回CPS・JPS・KAP Joint Congressを117回大会と併催の形で盛大に開催し、中国、韓国に対して日本のリーダーシップを印象づける機会となった。

118回大会(2009年春)も同じく、「咬合・咀嚼が創る健康長寿」をメインテーマとして、「インプラントと再生医療」、「ブラキシズムと補綴歯科治療」、「咬合と顎関節症」などが取り上げられた。また、「補綴歯科診療ガイドライン部会報告」、「歯周病と補綴歯科治療に関する部会報告」など、本学会の幅広い活発な活動の報告も行われた。

この2009年は、3月には「歯科補綴学専門用語集第3版」が発刊され、10月には、研究セミナーを基盤とした長年の活動の集大成として「歯科臨床研究の統計ガイド」が発刊された。また、英文誌の誌名をProsthodontic Research and PracticeからJournal of Prosthodontic Research (JPR, 年4号)に変更し、従来の本学会のオフィシャルジャーナルである日本補綴歯科学会雑誌の後継誌とした。一方、和文誌「日本補綴歯科学会誌」(年4号)をあらたに発刊した。

119回大会(2010年春)も同じく、「咬合・咀嚼が創る健康長寿」をメインテーマとして、「咬合・咀嚼と脳機能」、「咬合・咀嚼と睡眠」、「ジルコニアセラミック修復による審美補綴歯科治療」、「超高齢社会におけるリハビリテーション」、「オッセオインテグレーション獲得中の咬合管理」など、咬合に関する幅広いトピックが取り上げられた。

そして、本年5月の120回記念大会(2011年春)は、「咬合・咀嚼が創る健康長寿—補綴歯科が発信するライフイノベーション—」をメインテーマとして、「バイオエンジニアリングが招く補綴歯科イノベーション」、「補綴歯科治療に潜むドグマ」が取り上げられた。CAD/

表3 Official issues of Japan Prosthodontic Society
ガイドライン等の本学会の刊行物

歯科医療領域3疾患の診療ガイドライン(2002)
補綴歯科治療の病名(2006)
歯科補綴学教育基準改訂2006
リラインとリベースのガイドライン(2007)
接着ブリッジのガイドライン(2007)
補綴歯科治療過程における感染対策指針(2007)
歯の欠損の補綴歯科診療ガイドライン2008 * Minds 収載
歯の欠損の補綴歯科診療ガイドライン2008 別冊資料
有床義歯補綴診療のガイドライン(2009改訂版) * Minds 収載
義歯・クラウンの診察・検査用紙(2009)

CAMとDigital Dentistry, 咀嚼機能検査に基づく補綴歯科治療, 介護予防と補綴歯科などの学際領域のトピックについて, 関連学会とのジョイントシンポジウムが多数開催された。そして, 臨床リレーセッションと題した新たな企画を立ち上げた。すなわち, クラウンブリッジ, 欠損歯列を読む, パーシャルデンチャー, インプラントなど, 臨床に関するセッションを大会期間中のすべての時間帯に設定したが, 多くの参加者が集まり, 反響が大きかった。

以上, 100回大会(1998年秋)から120回大会(2011年春)までの13年間の本学会の歩みを学術大会を中心に簡単に振り返った。この間の著者の本学会の活動とのかかわりを振り返ると, 100回大会(1999年)では, シンポジウムの演者を務め, 田中久敏会長(1999~2001)のもとでは, 理事(編集委員長)として, 日本補綴歯科学会雑誌の査読体制の確立に取り組んだ。川添堯彬会長(2001~2003)のもとでは, 理事(国際渉外委員長)として, 国際フォーラムの開催やKAPとの交流協定締結のお手伝いをさせていただいた。大山喬史会長(2003~2005)のもとでも, 理事(国際渉外委員長)として, KAP-JPS Joint Meeting, GNYAP-JPS Joint Meeting などのお世話をさせていただいた。赤川安正理事長(2005~2007)のもとでも, やはり理事(国際渉外委員長)として, CPSとの交流協定, IPSとの交流協定などに関わった。平井敏博理事長(2007~2009)のもとでは, 副理事長を拝命し, ちょうど私が会長を務めていたAsian Academy of Prosthodonticsを本学会とのJoint Meetingとして神戸にて開催させていただいた。また, やはり当時会長を務めていたInternational College of Prosthodontistsの日本で

の開催に際して, 本学会の強力なサポートを頂き, 学術大会を成功させることができた。また, 第2回のGNYAP-JPS Joint Meetingのお世話をさせていただいた。佐々木啓一理事長(2009~2011)のもとでも副理事長(次期理事長)を拝命した。このときは同時に九州支部長も拝命し, 本学会ならびに九州支部の運営のお手伝いをさせていただいた。

ここまでで紹介しきれなかったが, 本学会は, 上述の活動以外にもガイドライン(表3), 医療問題, 教育問題, 専門医等, 多様で幅広い活動を重ねてきたことを, 強調しておきたい。

II. これからの日本補綴歯科学会の活動

私は次々期理事長候補適任者の選挙に際して, 「社会に信頼され会員も満足する日本補綴歯科学会を目指して」と題した所信を示したが, その骨子として, 原点への回帰, 臨床的視点の重視, 国民に貢献する専門医制度の展開, 学術的基盤の整備と発信, 世界に向けた国際交流の展開, 透明性の高い学会運営の6つの重点項目を掲げた。近年, ますます学会の公益性が問われ, 社会への情報発信が求められている。6項目の中でも特に, 原点への回帰と臨床的視点の重視の2点を軸に学会の活力を高め, 質の高い学術情報の学会内での創生と社会への情報発信を促進し, 社会的使命を果たしていきたい。そして, 社会に信頼され会員も満足する活力の高い学会を目指したい。

I. 原点への回帰

学会活動の原点は, 専門分野に興味を持つ者が集い, 研究(臨床)成果を持ち寄って議論し, 切磋琢磨するこ

とによって、学問（臨床）の進歩に寄与することにある。学会活動の原点である学術大会と学会誌を幅広い会員のニーズに適確に応える体制として、より多くの会員の参加を促進し、本学会の活力を高めていきたい。学会誌については、英文誌（JPR）を本学会のオフィシャルジャーナルとして、近い将来、是非とも impact factor（IF）を取得し、アジアを代表する補綴学関連の国際誌へと発展させたい。また、和文誌については英文誌との重複を避ける意味でも、英文誌とは異なった内容を中心とする。すなわち、臨床的な内容、専門医研修に役立つ内容、補綴学関連において確立された科学的エビデンスを整理解説する論文などを増やして、英文誌と和文誌で役割分担して会員の多様なニーズに応える体制としたい。学術大会については後述する。

2. 臨床的視点の重視

本学会は、臨床分野の専門学会であり、臨床の進歩を通して国民の健康の向上に資することが最大の使命である。本学会は臨床研究を推進し、臨床の進歩を主導する学会を目指さねばならない。たとえば、厚生労働省が発表している医療機関種類別医療費の統計を見ると、大学病院を含む病院における歯科医療費は、歯科医療費全体の約4.5%に過ぎず、診療所、すなわち開業歯科医院の歯科医療費が約95.5%を占めている。したがって、本学会の活動成果を通して国民の健康の向上に貢献するためには、大学を中心とした本学会会員の臨床活動だけでは不十分である。会員以外の臨床歯科医の診療に本学会の活動成果が広がる必要がある。学会から社会への情報発信の対象としては、一般国民ばかりでなく、歯科医療を支える臨床歯科医、医療や教育を支える行政組織、そして医学の発展に寄与する学協会などがあるが、なかでも臨床歯科医への情報発信はきわめて重要と考える。本年の120回記念大会の臨床リレーセッションは、そうした情報発信の場として企画したものである。今後も、こうした企画をより充実させ、臨床医の本学会活動への参加を促進する必要がある。また、本年4月時点での本学会の正会員6,334名中、実に半数を越える3,564名が大学以外の所属である。したがって、会員を対象とした企画においても、会員の過半数を占める臨床医のニーズを考慮して学術大会や学会誌の企画を考える必要がある。このような視点からも前述したように、英文誌と和文誌の役割分担を軸として、学会誌を会員の多様なニーズに適確に応える体制とする必要がある。

3. 国民に貢献する専門医制度の展開

本学会における専門医制度は、研修施設への所属、研

修期間、経験症例数、研修単位、症例報告、ケースプレゼンテーション、ケースプレゼンテーション論文の投稿、専門知識に関する試験等、取得のための要件が定められている。またそれらの要件は、年々整備、強化されてきた。しかしながら研修の実際の内容については、認定研修施設に任されてきた。佐々木前理事長のもと、鈴木前委員長を中心に教育問題検討委員会で議論を重ね、専門医研修カリキュラムが策定された。今後は、このカリキュラムの実質化を進め、施設認定だけでなく、各施設におけるカリキュラムの認定へと転換し、真に高い臨床能力を備えた専門医の養成を目指して行く必要がある。また、専門医資格認定基準の公正化、厳格化をはかり、外部評価に耐える制度にして、国民に信頼される専門医制度を構築する必要がある。

歯科においては、一般歯科、歯科口腔外科、小児歯科、矯正歯科の標榜が認められている。しかし、実際にはほとんどの歯科診療所の看板には、すべての標榜科名が記載されており、国民からみると医療機関の選択の目安になっていない。わが国の近年の高齢化とそれに伴う歯科関連の疾病構造の変化は大きく、歯科医療は、多様化し、高度化している。そのようななかで、すべての歯科診療所で、すべての治療が同じレベルで実践できる体制を整えるのは至難ではないだろうか。専門性を持った歯科医師とプライマリーケアを担当する歯科医師が、うまく分業して、多様かつ高度な国民の歯科医療ニーズに応える体制が必要ではないだろうか。補綴歯科専門医の養成とともに、そのような歯科医療供給体制の実現に向けて、具体的な対策を検討する必要がある。また、歯科医師の生涯研修の場は、スタディクラブや民間の研修会が主体であったが、今後は、専門医の養成を担っている学会や大学が生涯研修の場を提供してくべきであり、本学会も、生涯研修の場を拡大していかなければならない。

4. 学術的基盤の整備と発信

本学会が社会への情報発信を進めていくことはすでに述べた。その発信する内容を充実したものとするために、まず、学術的基盤を整備し、発信すべき情報の創成を図らねばならない。そのために学会主導の臨床研究の推進、EBMに資するエビデンスの構築、EBMに基づいた補綴治療ガイドラインの作成、高度先進医療開発の支援などを推進するとともに、症型分類や補綴の新病名などの検討を進め、新時代の補綴歯科の概念の提唱を目指していかなければならない。また、新たな学術領域を創生するような研究企画を推進し、歯科補綴学を含む新たな学術研究領域への、より多くの新たな研究資金の誘致を目指す必要がある。

5. 世界に向けた国際交流の展開

トロント会議のような国際的コンセンサス会議の本学会主導による日本開催を目指す。具体的には2012年にコンセンサス会議を日本において開催する。また、*Journal of Oral Rehabilitation* や *International Journal of Prosthodontics* のワークショップの日本招聘を図るとともに、本学会員の国際的学術集会への参加、招聘の機会の増大に努め、会員活動の国際化をすすめていきたい。

6. 透明性の高い学会運営

執行部の強いリーダーシップによるトップダウンの学会運営と会員の意見を聴く機会をより多く持ち、幅広い会員の意見に基づくボトムアップの学会運営をうまくバランスし、透明性が高く効率的な学会運営を目指したい。また、事務局の体制を整備強化し、会員が安心して学術活動に専念できるしっかりとした運営体制を築かねばならない。新法人法のもとでの公益法人化もその一つの方略と考え、推進していきたい。

III. おわりに

今後、本学会の活動は、国民の健康福祉の向上に実際に貢献することを目指していかねばならないと考える。その実現のために、本学会の活動は、歯科臨床のイノベーションを志向し、基盤を提供し、実践し、啓発することを目指して進んでいってはどうだろうか。私がかねてより折にふれて、「学会(大学)と臨床医が乖離している」、また学会内においても「研究と臨床が乖離している」のではないかという問題意識を持ってきた。今後、上述のような本学会の活動を通して、この「乖離」を縮めていきたい。そして、結果として国民の健康福祉の向上に実際に貢献する補綴歯科学会を実現したい。

著者連絡先：古谷野 潔

〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

Tel: 092-642-6376

Fax: 092-642-6380

E-mail: koyano@dent.kyushu-u.ac.jp